

本市の全国学力・学習状況調査結果概要

令和7年1月

本調査の目的は、全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、その成果を検証して学習指導の改善を図ることなどであり、平成19年度から文部科学省が実施しているものです。今年度の調査は、4月18日に悉皆で行われ、本市では、全校にあたる小学校13校（6年生455名）、中学校10校（3年生565名）が参加しました。

調査内容は、小学校が国語と算数、中学校では国語と数学が実施され、学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題が出題されました。また、調査する学年の児童生徒を対象とした学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する児童生徒質問紙調査と学校（学校長）を対象とした指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する学校質問紙調査が実施されました。

本市小学校においては、国語が平均正答率で全国を上回り、算数がほぼ同じという結果となりました。国語は、「言語の特徴や使い方に関する事項」や「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」に関しては基本的な言語能力の定着が見られた一方、「話すこと・聞くこと」の「集めた材料を分類したり関係付けたりすること」や「読むこと」の「読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと」については課題が見られました。算数では、「数と計算」、「データの活用」の領域で全国を上回りましたが、「図形」の「球の直径と立方体の一辺の関係から立式すること」、「変化と関係」の「速さの意味について理解していること」については課題が見られました。

本市中学校においては、国語も数学も平均正答率で全国とほぼ同じ結果となりました。国語は、「言語の特徴や使い方に関する事項」や「集めた題材を整理し、伝えたいことを明確にすること」に関しては基本的な言語能力の定着が見られた一方、「書くこと」の「自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること」や「読むこと」の「文章と図とを結び付けて内容を解釈すること」については課題が見られました。数学については、「数と式」、「関数」、「データの活用」の領域で全国を上回った一方、「図形」の「筋道を立てて考え証明すること」、「問題解決の過程や結果を振り返り新たな性質を見いだすこと」について課題が見られました。

質問紙調査からは、小学校・中学校ともに、地域や社会をよくするために自分が何かしてみたなどの回答が昨年度同様、全国平均を大きく上回っていました。由利本荘市の地域を素材としたふるさと教育が児童生徒によりよく反映されていることが分かる結果となりました。その一方、1日あたりの学習時間は減少傾向にあります。また授業でのICTの活用については、3年連続増加していますが、全国と比較すると下回っている状況です。放課後の時間とICTのより有益な使い方について、さらに改善していく必要があります。

令和7年度の調査については、国語、算数・数学、理科の3教科及び児童生徒質問紙について悉皆により実施されます。今後も、児童生徒の学びの状況を確認しながら確かな学力を育み、未来に向かってたくましく生きる力を身に付けさせることができるように、児童生徒一人一人に寄り添った指導の充実が一層期待されます。

小学校国語について

領域ごとの正答率を比べると、3領域で全国平均を上回っています。特に、「言語の特徴や使い方に関する事項」や「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」に関しては基本的な言語能力の定着が見られます。

一方、「話すこと・聞くこと」の「集めた材料を分類したり関係付けたりすること」や「読むこと」の「読書が自分の考えを広げること」に役立つことに気付くことについては課題が見られます。

【伝え合う内容を整理する】

目的や意図に応じて聞いたり話し合ったりすることを具体的に考え、集めた材料を整理しておくことがよりよい伝え合い活動につながります。

対話や話し合い活動を行う際は、集めた材料を内容ごとにまとめたり、互いに結び付けたりするよう指導することが大切です。事前に整理したメモを生かして、即興的に話し方を工夫して交流する活動を設定すると効果的です。

中学校国語について

領域ごとの正答率を比べると、2領域で全国平均を上回っています。また、「言語の特徴や使い方に関する事項」や「集めた題材を整理し、伝えたいことを明確にすること」に関しては基本的な言語能力の定着が見られます。

一方、「書くこと」の「自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること」や「読むこと」の「文章と図とを結び付けて内容を解釈すること」については課題が見られますので、指導を一層充実させることが必要です。

【考えが伝わるように工夫する】

自分の考えが伝わる文章を書くためには、語句や表現が読み手に与える印象を吟味するなど、表現の効果を考えて描写することが大切です。

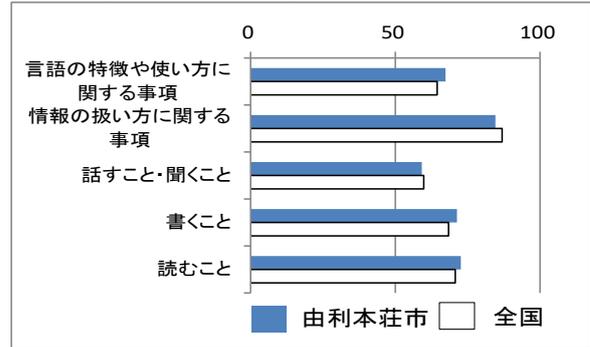
授業では、物語を創作する言語活動を設定し、工夫した描写によってどのような印象をもったのかをお互いに伝え合う活動を取り入れると効果的です。

質問紙調査から＜国語の学習について＞

国語の学習については、中学校において全ての項目で「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計が、全国の数値を上回っており、小学校は全国と同程度の結果となっております。また、90%以上の児童生徒が「国語の勉強は大切だ」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」と回答していることから、児童生徒が実生活や社会生活における国語の有用性を実感しながら、資質・能力を身に付けられるような授業実践が行われていることがうかがわれます。

今後も、児童生徒の国語に対する興味・関心が高まるよう「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、授業改善を一層推進していくことが望まれます。

<小学校 国語（領域）の正答率>

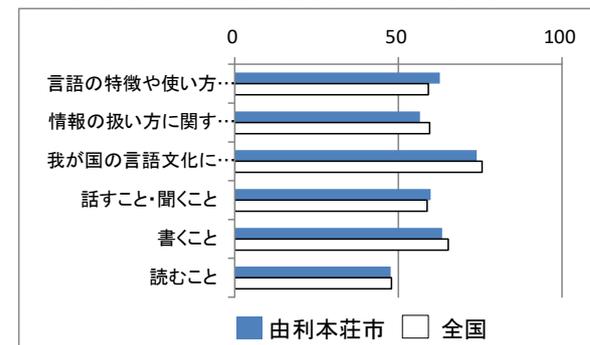


【読書の意義に気付く】

読書が、自分の考えを広げること」に気付くことは、日常生活において主体的に読書を行うことにつながります。

物語などの中の言葉や表現から自分を支える言葉を見付けたり、今までになかった考えを発見したりすることなどによって、読書の意義をより強く実感できるよう指導することが大切です。継続的に「読書の記録」を付けることは、児童自らが自分の成長を自覚することにもつながります。

<中学校 国語（領域）の正答率>



【文章と図とを結び付けて内容を解釈する】

様々な図表を伴う文章を読む際は、それぞれの部分がどの部分と結び付いているのかを確認しながら読むことで、書き手の伝えたい内容をより正確に読み取ることができます。

また、文章と図表の関連によってどのような効果が生まれているのかを考えると効果的です。

小学校算数について

平均正答率を見ると、数と計算、データの活用の領域で全国平均より高い数値を示しており、また、観点別では、思考・判断・表現において、問題形式別では記述式において全国平均を上回っています。

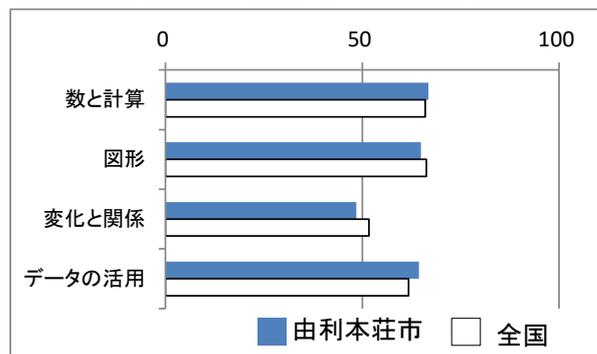
「図形」の「球の直径と立方体の一辺の関係から立式すること」、「変化と関係」の「速さの意味について理解していること」については課題が見られますので、指導をより一層充実させることが必要です。

【球の直径と立方体の一辺の関係から立式する】

箱の体積を求めるための式を書く問題ですが、ボール自体の体積を求めようとして円周率3.14を使おうとする誤答が多く見られました。

ボールがぴったり入る「箱の体積」を求めるという読み取りをしっかりと行うこと、ぴったり入るということは、球の直径が箱の一辺と一致すると考えられること等を、図などを活用して指導することで、改善を促すことができると考えます。

<小学校 算数（領域）の正答率>



【速さの意味について理解する】

家からポスト、ポストから図書館までの道のり、時間、速さが示されており、前半と後半の速さをたすという考えが見られました。

速さは「道のり÷時間」で求められますが、求めたい範囲（道のり、時間）を明確にして計算をすることが大切です。また、速さ、割合等はたしたりひいたりできる数量ではないことを、生活体験から考える機会も有効と考えます。

中学校数学について

平均正答率を見ると、図形の領域で下回っているものの、他の3領域では全国平均より高い数値を示しています。観点別では、知識・技能において、問題形式別では短答式で全国平均を上回っています。

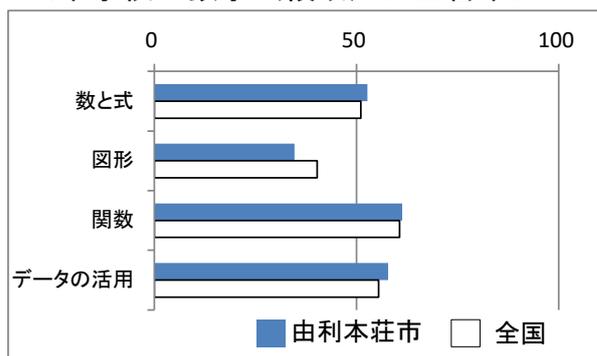
「図形」の「筋道を立てて考え証明すること」、「問題解決の過程や結果を振り返り新たな性質を見いだすこと」については課題が見られますので、指導をより一層充実させることが必要です。

【筋道を立てて考え証明する】

既習事項から根拠を見だし、証明しようと挑戦する回答が多く見られました。

証明問題の解答（記述）は必ずしも1つではなく、個々の思考過程や使った既習事項などにより少しずつ異なります。授業や家庭学習の際に、複数の解答例を示すことで図形の見方や表記の仕方が豊かになると考えます。証明の全文ではなく一部を記述することも効果的です。

<中学校 数学（領域）の正答率>



【解決の過程や結果から新たな性質を見いだす】

2つの三角形の合同を証明すると、対応する辺や対応する角など、等しい部分を見つけることができます。

今回は1つ前の問題で2つの三角形の合同が証明されているため、それを利用することができるかが問われました。問題で指示されている部分以外の等しい辺や角はどこか目を向ける機会を意図的に設定することも、多様な出題方法への対応に有効です。

質問紙調査から<算数・数学の学習について>

算数・数学の学習への意識については、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計が、小・中ともにほとんどの設問において全国の数値を上回っており、望ましい状況が継続しています。小学校では、「算数の学習は将来社会に出たときに役に立つ」が97%を超える回答となっています。中学校では、「数学の学習を普段の生活で活用できないか考える」「別の解き方を考えようとする」「数学の学習を今後の学習で活用しようとしている」の設問で、全国平均より+10ポイント以上となっています。

しかし、算数、数学ともに「授業の内容はよく分かる」の設問が全国より下回っていることが課題です。課題を自分事として捉えられる導入、ICTの有効活用等を通して、個別最適な学び、協働的な学びにつながる授業改善の継続が求められます。

児童生徒質問紙について

質問紙調査は、小学校、中学校ともに、学習習慣、生活習慣等幅広く質問されています。その中で注目すべき項目や今後に生かせる項目について掲載しました。なお、この調査では小学校6年生、中学校3年生が回答しています。

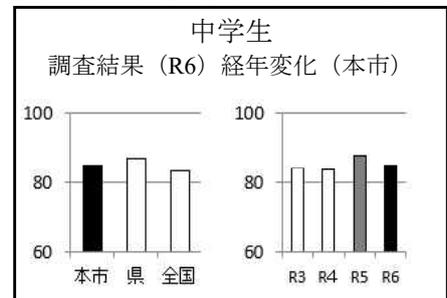
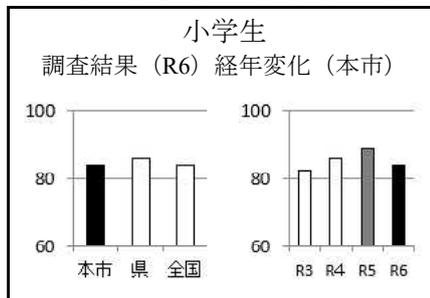
1【自分には、よいところがあると思いますか】

質問番号(9)

《当てはまる、どちらかといえば当てはまる割合の合計》

小学生84.3%、中学生84.9%が自分には、よいところがあると思うと回答しています。昨年度と比較すると小・中学生とも減少していますが、全国平均並みの結果でした。

今後も道徳教育や学校行事等において体験活動の充実を図り、様々な面から児童生徒が自分を見つめ直したり、自分のよさを生かし活躍する場を確保することが大切です。さらに学校生活全体を通して、自己有用感を高めることができるよう、児童生徒が互いを認め合い、高まり合うことができる学級・学校づくりを継続していくことが求められます。



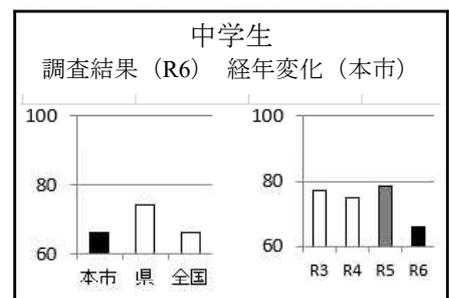
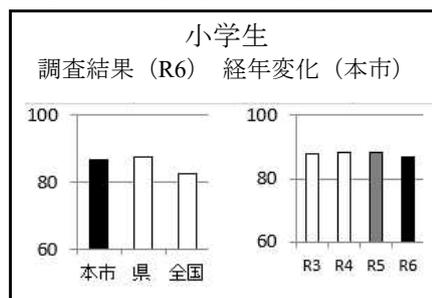
2【将来の夢や目標をもっていますか】

質問番号(11)

《当てはまる、どちらかといえば当てはまる割合の合計》

小学生86.8%、中学生66.1%が将来の夢や目標をもっていると回答しています。昨年度と比較すると中学生が大きく減少しています。全国平均並みの結果ですが、県平均と比較しても低い結果であり、本市の課題として捉え、取組を充実させていくことが大切だと考えます。

校外学習や職場体験、ふれあいPR事業などキャリア教育に関する様々な活動を通して、地域の方々と触れ合い、ふるさとのよさを見つめ直したり、将来の生活について考えたりする機会をさらに充実していきたいと考えます。また、毎日の授業の中で、児童生徒が自分の意思や意見を持ち、選択し自己決定していく場面を数多く取り入れた授業展開が、主体的に行動したり努力したりする態度を育てていくことにつながります。



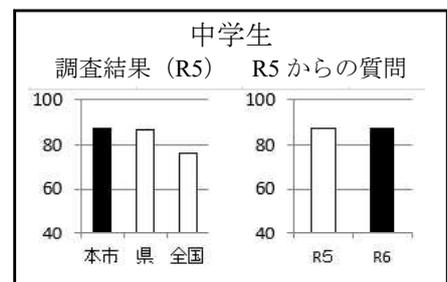
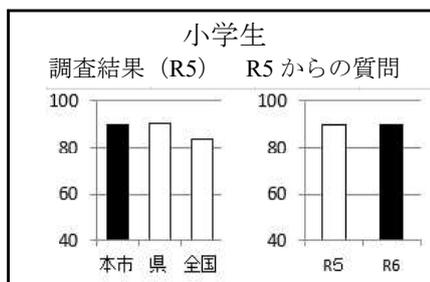
3【地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか】

質問番号(25)

《当てはまる、どちらかといえば当てはまる割合の合計》

小学生89.8%、中学生87.2%が地域や社会をよくするために何かしてみたいと回答しています。昨年度から新設された質問で、昨年度同様、全国平均を小・中学生とも大きく上回っている結果となりました。

引き続き、日々の授業や学校行事などで地域の方々から支えていただいていることに感謝しながら、支援が一方通行にならないように「地域や社会のために自分たちができることは何か」を考え、実践できる子どもを育てていくことが大切です。今後も、カリキュラム・マネジメントを基盤とした教育課程を工夫し、地域が核となる学校づくりを目指していくことが重要だと考えます。

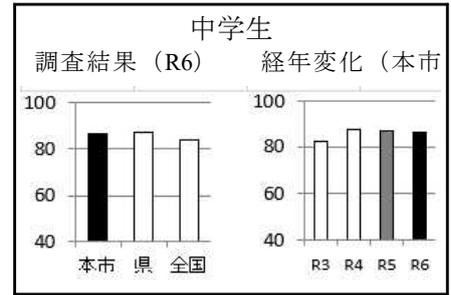
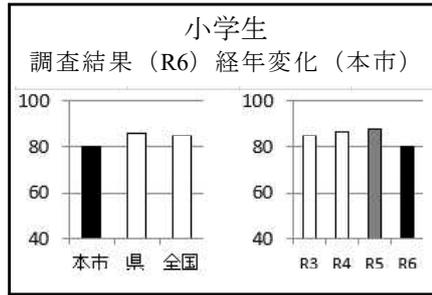


4 【学校に行くのは楽しいと思いますか】

質問番号（15）

《当てはまる、どちらかといえば当てはまるの割合の合計》

小学生の80.0%、中学生の86.9%が学校生活を楽しいと感じており、経年変化を見ると、小学生の回答において数値が少し減少しています。各学校では、定期的な面談やアンケートを実施し、児童生徒の実態を的確に把握したり、悩みや問題に



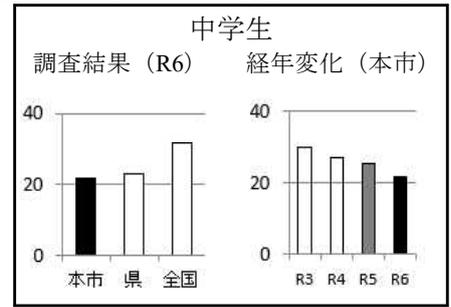
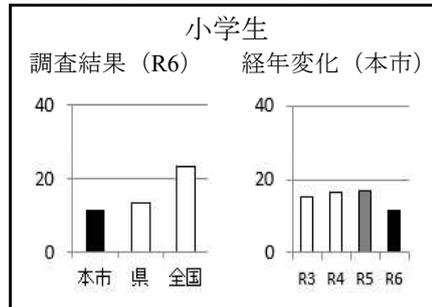
迅速に対応したり、一人一人に寄り添う支援をしています。また、体験学習や学校行事を通し、児童生徒の活躍の場を増やしたり、お互いを認め合える機会を意図的に設定したりして日々の授業改善に取り組み、誰にとっても分かりやすい授業を心がけています。今後も、さらに一人一人が自分のよさを発揮し、充実した学校生活を送り、より多くの児童生徒が「楽しい」と実感できる学校・学級づくりができるよう支援してきたいと考えます。

5 【学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）】

質問番号（21）

《3時間以上、2時間以上3時間より少ないの割合の合計》

授業以外で2時間以上学習している小学生の割合は11.5%、中学生の割合は21.9%で、小・中学校ともに全国平均を下回り、経年変化を見ると昨年よりも数値が減少しています。質問紙の中の「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、ゲームをしますか。」や「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをしますか。」という質問に対しては、小・中学校ともに約20~30%の児童生徒が「3時間以上している。」と回答しています。児童生徒が自分の学習への取組を振り返るとともに、余暇の過ごし方を含め、家庭での時間の使い方について考える必要があります。また、保護者面談や学校・学級通信等で話題にしなが



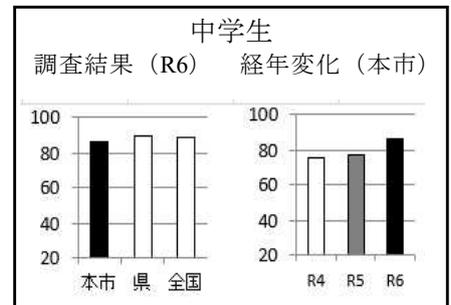
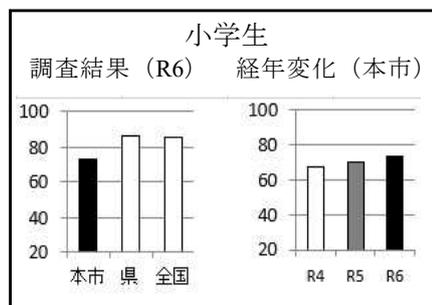
ら、保護者に協力を呼びかけていくことも必要だと考えます。

6 【5年生までに（1・2年生のときに）受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか（R3からの質問事項）】

質問番号（27）

《ほぼ毎日、週3回以上週1回以上の割合の合計》

小学生の73.7%、中学生の85.1%が昨年度まで受けた授業で、週1回以上ICT機器を使用したと回答しています。経年変化を見ると、年々割合が増加していることが分かります。各校において、校内研修会や情報教育担当からの情報提供等を通



し、ICT機器の活用の充実が図られ、活用頻度が多くなってきていると考えられます。また、市でもICT活用研修会を実施し、各校の効果的な事例やデジタルドリルの活用方法等について研修や情報提供を行い、各校で伝達するよう働きかけています。今後も、校内外の研修会等を通し、教師のICT活用能力を高め、授業の中で適切な場面で効果的にICT機器を活用していくことが大切であると考えます。